

うちに所内の補修作業も終わり、それぞれと配置替えが行われ、私は収容所から五キロほど離れた所にある煉瓦工場の粘土掘り作業に配属されました。粘土を掘ってトロッコに積む重労働です。

昭和二十一年三月軍隊当時七十キロありました体重が栄養失調で四十キロになり、作業ができないため、医務室へ行き、医師に診察していただきましたところ、直ちに入院と診断されて同敷地内の第一病院に入院いたしました。約一カ月で退院となり、健康回復のため、病院の軽作業員となって約五カ月間病院の入浴当番を初め、死体埋葬、農場の馬鈴薯掘りなどの作業に従事して、九月ごろ原隊に帰り、炊事場勤務となり、寒い間を過ごして、二十二年四月ごろより市街の住宅建設作業に従事しました。

そして九月中旬ごろ東京ダモイで貨車に乗せられ、ナホトカに着きましところ、ナホトカ輸送業務要員の交代を命ぜられ二十三年五月まで作業係として勤務し、二十三年度の第一便にて舞鶴に上陸した次第です。

昭和二十一年三月、栄養失調で四十キロの骨と皮の

体になったときは、今まで二度命拾いしたので今度こそは駄目かと心で覚悟しておりましたが、お陰で三日の命拾いをさせていただきました。これも御先祖様が我が家にとって私を必要とされたのでお守りくださったと思ひ、毎日感謝の日々を五十年余過ごしてまいりました。来年は七十七歳を迎えることになりましたが、もう一つ忘れることができないのは入院中、死体となって埋葬した多くの戦友たちは現在、十分に弔っていただいているだろうか、と非常に気掛かりでなりません。

シベリア抑留記

兵庫県 石田 寿

生年月日 大正十一年七月八日生

入隊 昭和十八年一月十日、部隊名 姫路第五一部隊
(砲兵)

昭和十八年満州に渡る。部隊は満州第三三〇部隊の二番砲手になる。

昭和二十年一月大連陸軍病院に入院。その後、航空部隊満州第八三五部隊に配属された。

第三三〇部隊の本隊は南方に進出し全員全滅する。軍隊における初めの一年二カ月は毎晩ピントの連続であったが、これが死を覚悟の上の上官の命令であるとして当然のごとくそれに従った。

敗戦を八月二十九日まで知らず、特に八月二十日から一週間は激しい激戦が続き、多くの戦死者が出た。全滅に近い戦いのあとで武装解除を受け、約二十日間ほど北に歩き続けたが、この道程は苦しみの戦いで、食べる物と言えば馬の上から投げられるカンパンと、歩く道筋の窪みに溜まった泥水であった。その上、足が痛み落伍し、力つきて倒れ、そのまま死んでいく人が教多くあったがどうすることもできず、今はこれらの人々の名前さえ知ることができない。

その後、どこか分らないが、屋根のない貨車に乗せられて「イズベストコーワヤ」地区に着いた。収容所はすべて天幕で、一つの天幕に二十五〜三十人が重なるようにして寝ていた。冬が近づくにつれて気温は

下がり、夜ともなれば零下五〇度の寒さでも便所は天幕の外にあって、便所から帰ってそのまま凍死する人が一つの天幕に一人か二人は必ず出るようになった。「ふとん」がないので服はもちろん防寒用具すべて外套から手袋、長靴に至るまで身に着けて寝ていても朝になると凍死する人があった。朝になるとソ連人がソリを引っ張って凍死した人々を集めて回っていた。この時期まだ抑留者の名簿もなかった。

二年目の冬、ようやくソ連軍の兵舎が収容所になった。今までポロ布で体をふいていたが、このころ初めてドラム缶の風呂に入ることができた。風呂の中でみんな涙を流した。天にも昇る心持ち、こんな良い心地の風呂は日本に帰って五十年いまだ一度も味わったことがない。

朝は黒パン三百グラムと塩汁、昼と晩はトウモロコシのお粥一合と粟のスープがソ連領に入って以後、日本に帰るまで続いた。伐採に行く途中の草や木の新芽は私たちの大切な食料であった。猫や犬、ネズミや蛇など（蛇は八月に時々見つけた）、およそ食べられる

ものはみんな食べた。日本に帰るまでただの一度も腹いっぱいになったことなどはなかった。

今は想像しがたい食事と、厳しい寒さと強制労働の上に、洗脳教育も毎日のように繰り返されるようになってた。このころ、栄養失調で入院する人や死んでいく人が数多く出た。

また、このころ私たち捕虜の体の健康度によって番号が付けられた。一級は一人が三リューベの木を切ったら百パーセントであり、二級は二リューベ、三級は一リューベで百パーセントと見なされ、四級は病人であつた。

百パーセントの仕事ができない者には、その翌日の朝食のパンは三百グラムからそのパーセントによって削られるのである。

捕虜の仕事は、木の伐採と、それを山から馬で挽き出す仕事と、それをトラックに積み込むことが主体であつた。それには、いずれも高いノルマが課せられていた。このころは、ただ生きていくだけが精いっぱい、夜になつてもだれ一人話し合う者もなく……。

そんな中で、洗脳教育の一環として自己批判とか相互研究とかの名のもとに勉強させられたが、ただ祖国に帰りたい一心でソ連の人々に睨まれないように心がけた。

三年が過ぎ四年目になつても、食事と強制労働は一向に改善されることなく、洗脳教育はますます厳しくなる一方で、日本新聞も発行されるようになった。心の片隅で多くの疑いを抱きながら、祖国に帰る日を待ち続け、苦しみに耐え、ついに力尽きて死んでいく同胞の姿はどんな言葉を通して他の人に伝えることはできないように思います。

昭和二十四年十月、高砂丸が「ナホトカ」に入港しました。このまま死を迎えるであろうと覚悟していた私たちは、乗船した後も日本に帰ることができるかどうか信じられませんでした。が、いよいよ日本の島の姿を見たとき、わけの分からぬ大声を張り上げ、落ちる涙をふりしぼって泣きました。

この文章を書きながら涙が出ます。

あの感激の瞬間はもう二度と私の人生にはありません。

ん。終わりに、亡くなられた多くの方々の冥福を心からお祈り申し上げます。

ライチハでの抑留生活

北海道 桐 木 留 吉

大正九年、勇払郡安平村で生まれ、同郡厚真村の小学校高等科二年卒業。同村及び留萌郡鬼鹿村で家業の炭焼き作業を手伝い青年期を過ごした。

昭和十六年二月、北部七部隊（工兵第七連隊）「旭川」に現役入隊。直ちに満州国東安省の工兵第八十三連隊に転属。同十二月に中支に一時派遣されたが、戻って東安省の警備に当たり、陸軍伍長となり、終戦時は関東軍第二幹部教育隊第四小隊の分隊長であった。

二十年八月、突如ソ連軍に急襲され、牡丹江付近で民間人を巻き込んだ混戦状態となり、女性を含む多数の死傷者が出た。この時点で関東軍の規律統制は崩壊し、軍民混在でソ連軍に拿捕^だされ、牡丹江近郊に軍人

のみ二千名の集団とされ、武装解除の上、同年十一月下旬、貨車でソ連領に連行された。

抑留先は、アムール川を挟む黒河対岸のライチハで、帰還までここに收容されていた。

畜産地帯と見られ、牛を追い出した牛舎が收容先となった。丸太作りの壁塗り、堅牢な建物で糞臭漂^うつ中、ここに押し込められたが、一人当たり畳一枚分の余裕はあった。採光、換気不良であったが、暖房（薪）効果高く、終戦時の服装のままで過ごせ、ソ側からの防寒具は支給されなかった。牛舎一棟当たり二〜三百人收容され、これらの牛舎がかなり散在していた。

ソ軍の女医から炊事要員に指名され、他の要員と共に二千人の同僚のため炊事作業に就かされ、帰還まで続けさせられた。

支給された糧秣は粗悪なもので量も少なく、塩蔵鱈のスープ、雑穀の粥のみで常に飢餓状態が続き、所外で集めた雑草で補食したが、飢えは募るばかりであった。しかし、私は炊事担当で、この悲惨さから免れることができた。同胞たちは栄養失調の中、出役させら